

超音波検査を契機に発見された浅側頭動脈瘤の1例

◎森 亘平¹⁾、谷口 まどか¹⁾、木村 千晶¹⁾、川添 智佳子¹⁾、友井 紀子¹⁾、川端 陽子¹⁾、東 明美¹⁾、北川 勇一¹⁾
近江八幡市立総合医療センター¹⁾

【はじめに】浅側頭動脈瘤は他の動脈瘤と比べて稀であり、その多くは頭部外傷が原因と言われている。今回我々は超音波検査が有用であった浅側頭動脈瘤の1例を経験したため若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】30歳代、女性。【主訴】右側頭部腫瘍。【既往歴】妊娠高血圧症候群。

【現病歴】半年前に右側頭部前方の皮下腫瘍に気づき、その後、腫瘍が徐々に増大してきたため近医を受診し、精査加療目的にて当院皮膚科に紹介となった。

【理学所見】右側頭部前方に無痛性の拍動性腫瘍を認め、皮膚には変色は認めなかった。

【神経学的所見】特記すべき所見は認めなかった。

【血液検査】WBC：4900/ μ L、CRP：0.01mg/dL、赤血球沈降速度 30分値：1mm、1時間値：2mm、2時間値：7mmと炎症反応の上昇は認めなかった。

【超音波所見】右浅側頭動脈に最大短径は5mm程度、病変長21mm程度の紡錘状の瘤を認めた。瘤内部には壁に血栓を認めるが、血流シグナルが検出され、閉塞はしていなか

った。浅側頭動脈自体に壁肥厚や辺縁低エコー帯は見られず、巨細胞性動脈炎を示唆する所見は認めなかった。

【考察】浅側頭動脈瘤の約8割が交通外傷やスポーツ外傷、転落によって発生する仮性動脈瘤と言われており、真性動脈瘤は稀とされている。真性動脈瘤の原因としては動脈硬化や血管炎等の報告がある。本症例は外傷の既往がなく、超音波検査での瘤の形態からは真性動脈瘤が考えられた。しかし、年齢を考慮すると動脈硬化による変化は考えにくく、また現時点で血管炎を示唆する所見も指摘出来なかったため、原因は不明であった。更に病理組織学的診断も出来ていないため真性瘤か仮性瘤かの確定診断には至らなかった。

【結語】今回、外傷の既往がない浅側頭動脈瘤を経験した。瘤内の状態や血管炎の有無、血行動態などの経過観察に超音波検査が有用であり、今後3ヶ月毎に超音波検査で経過観察予定である。

(連絡先：0748-33-3151)